

「こころの授業」で未来を…

神奈川県 南足柄市
 社会福祉法人 県西福祉会 障害者支援施設 足柄療護園
 生活支援課 課長 山岸直広

1 はじめに

障害を持つ方の実際の体験や想いを届けてほしいとの依頼を受け、ある大学の授業に招かれました。はじめて活動を行ってから約5年間、障害を持つ方が自らを語る活動を「こころの授業」と称し取り組んできました。小さいながらも徐々に広がり、その講話は聴いていただいた多くの人々に感動を届けました。加えて、この活動の取り組みは、語るご本人たちにも変化をもたらしました。

障害をお持ちの方の声をもっと多くの方々に届けたい。そして、ひとりでも多くの人たちに障害者の福祉を身近に感じてほしい。そんな思いでこの活動を紹介いたします。

2 事例の紹介

(1) こころの授業の取り組み状況

①活動の開始 平成20年11月～

②これまでの活動実績 活動回数 35会場
 聴講者数 2100名

③活動場面

中学校「命の大切さ」「共生社会の実現」

高校「体験実習を控えて」

大学 授業のゲストスピーカーとして

「日本女子大学」「北里大学」「小田原女子短期大学」

民生委員の方々などの施設見学時にも活動実施

④活動参加者 身体障害者10名（入所者5名 通所者5名）

障害の種別

脳性まひ2名、脳血管障害後遺症4名、進行性疾患1名、脳挫傷後遺症2名、
 頸椎損傷1名

⑤関係スタッフ 支援員、言語聴覚士

⑥講話の内容

「小学生に入学する時、母が学校に手続きにでかけると、『障害のある方の入学は出来ない』と断られ帰って来ました。母はそのことをずっと悲しんでいたの、僕もとっても悲しかった。19歳の時に曲がった両足を手術して、松葉杖で立つことが出来ました。立ったら高い所が見えて、いいもんだなあと思いました。その時見た景色は今でも浮かんできます。」

「障害者になる以前と今と変わらないことだってあります。きれいでいたいという気持ちもそう。メイクは自分でします。どこかに出かけるときはおしゃれをしたいという気持ちだっ



て変わっていない。」 など

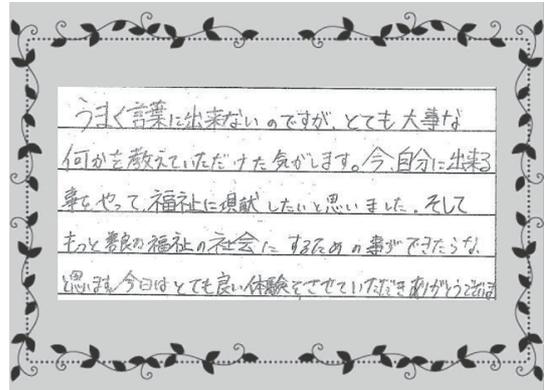
⑦活動の謝礼 施設内通貨で協力費支給

(1 時間を超える講話 2000 円/1 時間未満の講話 1000 円)

(2) 聴講者の反応

多くの会場から、感想文やレポートが届いた。数行のものから、用紙一杯に書かれた感想があった。

- とても大事な何かを教えていただいた気がします。今自分に出来る事をやって福祉に貢献したい と思いました。そして善良な福祉の社会にすることが出来たらと思ひます。
- 話を聞いて僕も出来るだけ福祉のことについて関わりたひと思ひました
- 一人一人の命の重さがこんなにも重い大切なんだということをはあらためて実かんしました。日々普通に生活していたのが、こんなにも素晴らしい事なんだと考えるともう少し今出来る事にチャレンジして1日を悔いなく楽しく生きていこうと思ひました。



(3) 講話者の変化

「長いこと自分にはリハビリが必要なんだとは思っていませんでした。一生懸命リハビリに取り組んで改善している他の人たちの姿を見ていて、負けん気が強い私に、ライバル心が芽生えたのかもしれない。3年前の講演活動で、リハビリ面の目標として掴まり立ちが出来る事と言っていましたが、こうして皆さんに宣言すると手抜きをすることも出来ず、頑張っています。そして訓練の時にはじめて歩くことができました。とても嬉しくて涙が出そうになりました。」と、リハビリに対して努力することを誓い、今では訓練の時に歩けるようになったことを笑顔で話している。

3 考察

(1) ここまでの「こころの授業」を振り返って

障害をお持ちの方の講演活動を「こころの授業」～こころへメッセージ～と称し、学生向けや施設見学の際に実施してきた。小さな活動が口コミなどで広がり、ボランティアの養成講習会、民生児童委員の研修、学習塾、他県の大学やなどに呼ばれる機会も増え、3人からスタートした活動も10人に増えた。

まったく仕組みのないところからのスタートであったが、コミュニケーションが難しい方でもプレゼン方法の工夫で活動に参加できるようになった。活動に参加した方には、施設から施設内通貨で謝礼が出るような仕組みも確立し、より役割としての意識を高めることができた。

講話の原稿づくりに取り組むことで、今まで見えていなかった「家族への想い」や「障害に対する心境」などを知ることができ、支援するスタッフの意識もかわってきた。

(2) 講話を聞いた方の変化

聴講した感想から、「こころの授業」が心に響くものになっていると思えた。

多くの方が「はじめて障害者の話を聞いた」と書いている。障害者の声を直接届ける大切さに加え、障害者とかかわる機会となることに、この活動の大切さを感じた。感想の多くに「元気をもらった」「希望を持って生きて行こうと思った」「あたり前のことが幸せなんだ」「家族を大切にしようと思った」とあるように、聞いた人本人の心になんらかの変化を届けていることが実感できた。

また、「福祉にかかわりたいと思った」との言葉があるように、次の世代を担う中学生や高校生に、「福祉」という仕事の選択肢があることを知る機会にもなっているとわかった。

(3) 講話者の変化

活動当初はあまり気に留めていなかったが、講演者にも変化が生まれた。明確な役割を持ち、次の講演会を目標にした生活を続けることで、感情的に安定的になった。講話での宣言がきっかけで、リハビリ面への取り組みが積極的になり、障害を持ってから15年もの期間が経過しているのに、平行棒での歩行ができるようになった。

コミュニケーションの障害が伴っているため、普段は話すことも億劫になりがちだが、活動の練習や実際の講話を行うことで、滑舌が良く聞き取りやすくなった例などが見られ、個別支援の大切な取り組みの一つとなってきた。



4 おわりに

障害者や高齢者、子供達が安心して生活できる社会。困っている人に手を差し伸べることがあたりまえの社会。笑顔で過ごせる社会。人と人とのつながりが深い社会こそが「人にやさしい社会」なのでしょう。「人にやさしい社会」の実現こそ、この先の未来の福祉、そしてすべての人が幸せになるのではないのでしょうか。若い人たちの「心」が温かくなり、人に対しやさしいことが、いじめや偏見などといったことが少なくなるきっかけとなると思います。

一人でも多くの方に「こころの授業」を聞いていただきたいと思います。そのためには「活動に賛同し活動の場を提供してくれる方々を増やす」ことが必要です。また、この活動に取り組んでいただける事業者や当事者とのつながりも広げていきたいと考えています。

全国で「こころ授業」が開催され、最終的にはやさしい人が増えることで「つながりの深い社会」が実現することが私の夢です。